



畫本西遊全傳

編

三

2500
4023



神遠門
號 2500
卷 40-23

池清



繪本西遊記三編卷之三

岳亭丘山譯

唐三藏路阻火焰山

孫行者一調芭蕉扇

斯て三藏の亦行者を得て心惟喜四人愈西方へ進む夏月の火々天
と過く又三秋の霜景ふ逢師徒路を急ぐ炬ふ忽ち熱氣人
か如く三藏の曰く時今秋の冷氣ふ向ひ念生斯様ふ執る氣あつな
らん此時路邊ふ一構の房舎あり三藏馬より下り門内ふ一人
の老人出まると曰く長老の那里より来り玉のや三藏の曰く貧道
を東土大唐より西天ふ到り経を求むの僧なり一行四人此處まで
候ふ老人聞て頓て三藏を家の裡に請ぐ茶飯を備て管待する三藏聞
て曰く此死秋ふ逢て那ぞ却て炎熱の氣あつや老人が曰く此處火焰山と
唱ふ山あり春と秋と四季ともふ比皆暑く三藏又問其火焰山の何

繪本西遊記三編卷之三

方ふ有や老人が曰く彼山の爰と去度六十里ふして西天に到る大路なり此
山八百里が間四方盡般火焰にて一寸も草生むるまじき若此山を越んと
すべし假令鐵の軀なりとも忽ち化尽て水と成るべし三藏老人が詞を聞て
大いふ心驚色を失ひ座より行者老人に對ひて曰く此處は草も
生ぜざるところ怎生して五穀と殖と一命を繋ぐや老人が曰く倘五穀を殖
んと欲する時の鉄扇仙人の寶貝芭蕉扇と云ふのを借用の彼芭蕉扇を
一度搦け火を鎮め再度搦けの風を生じ二度搦けの雨を降せ我輩
五穀を殖んとする時の渠が芭蕉扇を借ころり然してこの酬謝を備へざる
時の渠決して扇を借む爰を以て毎年養ひ紙に書を認め猪羊鵝酒
を備へて仙山に到りて拜して是を借然して五穀を殖る穀実として後の又火を
生下原のぞく火焰山と成るる行者が曰く其仙人の巢穴は何と云ふ死ゆ

て此處より幾句の行程あるや老人が答て是より南に當りて翠雲山と号
し山あり山中に芭蕉洞と云ふ巖窟あり彼仙人爰に住む行程凡五百
里より行者笑を會んで曰く氣得々々我則ち其扇を借まりて火を搦ぎ
消て此山を越へざるかと忽ち雲に打乗て南をさして出たり老人大い
に驚き此長老雲に跨りて霧に登る宣ふ是神なりて弥唐僧と
恭敬する斯く行者の少時の間も翠雲山に到り雲を下りて見ゆ心驚
一人の樵夫ふ逢行者向て曰く此山翠雲山なりや樵夫答へて曰く則ち
翠雲山ふて候ふ行者又問鉄扇仙人の芭蕉洞は何地ふ有や樵夫又
答へて曰く芭蕉洞のありと雖も鉄扇仙人といふものぞ唯一鉄扇が玉
といふの在羅刹女とも名づく則ち牛鹿玉が妻なり行者是を聞て大
いに驚き心裡に思ふや自ら是又我敵なり向年我羅刹女が養子紅



らせんぢよが
 羅刹女
 芭蕉扇
 びやうせん
 びやうせん
 悟空搦

會入西遊記三編八三



會入西遊記三編八三

孩兒を降伏しつゝ既も御さまの目破めやぶ兒こ洞ほらふて渠ちが伯父おぢい逢あ逢あ時ときも其その恨うらみ
を以もつて水みづを運おんと争あひつゝ今いま又また紅孩兒こうがいが母親おむい逢あ逢あ彼かの寶貝たからものを借か
へんとりものも怎いかん生借なまかべき道みち有あんや今いま此この期とき小臨せうりんへ十分じふぶん利害りやくがい然しかり
雖いふも是こゝろを借かでり西方さいほう小行せうかう支能しにやうのど且かつ試し小是こゝろを借かへんと云いて倘たう肯けんせ
る時とき亦また別べつ思惟しゆい有あべつと頓とんて洞ほらの前まへ小到せうたうと牛ぎう大たう哥か門もんを排ひけと呼よ
そ多おほく裡うちより一人ひとりの女性ぢゆうせい門もんを開ひらきて何なん者ものぞと向むか行者かうぎやう曰いく我われの東とう土ど大
唐たうたうより西さい天てん小到せうたうの経きやうと氷ひやうの故ゆゑ門もん孫そん悟ご空くうとり小者せうしやそり當あた今いま火か焰えん山さん
越こえつて爰こゝ小来きたつて昔むかし蕉せう扇せんを借かへんと欲ほつく小早せうさうく公こう主しゆ小告こくよ女性ぢゆうせい
是こゝろを閉して裡うち小入いり公こう主しゆ小報ほうと羅ら刹せつ女にょの孫そん悟ご空くうの二に字じを向むかより忽とつち大だい
小怒せうどの三さん日じつの宝ほう劍けんを引ひ提ていく孫そん悟ご空くう何なんを小在あり首くびを渡わたせと呼よつて洞
門もんの外そと小出い出でる行者かうぎやう礼らいを施せして曰いく彼かの老らう孫そん爰こゝ小在あり礼らいを行いふ

那なんぞ敦とん圀くわんのや羅ら刹せつ女にょが曰いく小吾わがとて嫂せう々々と小怎いかん的てき小你なんぢが嫂せう々々
々々んや行者かうぎやうが曰いく尊そん府ふ牛ぎう鹿らく王わうと吾わがと往わう昔むかし義ぎを結むすんて日ひ月げつと
成なりて公こう主しゆの牛ぎう大たう哥かの令れい正せいとて何なんぞん小怎いかん麼な嫂せう々々と稱なづせざらん羅ら刹せつ女にょが曰い
く小汝なんぢはは猴こう夫ふ小の親おやと有あるぞと猥わうり小紅こう孩がい兒にを言いふ今いま又また爰こゝ小来きた
つて擅せん小扇せんを借かへんと云いて吾わが怎いかん生借なまかへらんや行者かうぎやう曰いく嫂せう々々元げん小来きたの仔こ
細こ細こと知して誤あやちて吾わがを恨うらむるの言いふと今いま即すなはち紅こう孩がい兒に吾わが師し父ふを担かへて煮ゆ
食くんとて燒や倅し小觀くわん音いん菩ぼ薩ざつ紅こう孩がい兒にを弟てい子しとつゝ小當たう今いま正せい果くわを
得えて善ぜん財ざい童どう子しとつゝ天てん地ちと壽じゆを同どうじに嫂せう々々吾わが小謝しゃ礼らいとて云いふ
ため却かへて吾わがを恨うらむるや羅ら刹せつ女にょが曰いく此この儀ぎ猴こう舌せつ小誇かうる言いふを止とめて我われ
劍けんを喚こゝろみて見み下くだと一いつ道だう小伐はつて蒐そうる行者かうぎやう鉄てつ棒ぼうを以もつて架か止とめ天てん晚ばん小到
るやと戦せんひつゝ小羅ら刹せつ女にょは戦せんひつゝ密ひそかに蕉せう扇せんを取とり行者かうぎやう小向むかひ一いつ度ど

魂と擡たたせしし勿なき大風吹ふききて行者が軀こゝろと空そらに吹ふき影かげ洩はる形かたちのう
 羅刹女らしやくにょは小勝せうしやうを得えて河中かうちゆうに帰かへり入い行者ぎやうじやうの芭蕉扇ばしやうせんに搦あびて成なす
 高たかく舞ま昇のぼりて飄へ々々蕩たう々々とて扇あふ落お葉はの負おるが如ごとく流ながるは花はなの
 散ち浮うきぬ小標せうへんを一夜いちやゆて衝つ々々天てん曉きやう近ちかき頃ころをひ一座いざの山やまの巔たかねに落おち
 着きころ行者ぎやうじやう又また時ときあつて心こゝろを定さだめしし此山このやまを見みるは是このとき則すなはち須弥山しゆみせんに
 行い者ぎやうじやう嘆なげ息いきつぎ偕たもも巖いわき芭蕉扇ばしやうせんの奇き特とくなる此山このやまより火焰山くわえんよ
 り行程ぎやうじやう何なに計けい有あらん昔むかし日ひ我われ此處このところに靈れい王おう菩薩ぼさつを求もとめては黃風怪わうふうかい
 と上かみ望のぞみ伏ふせしし日ひ菩ぼ薩さつ小せう對たい面めんして行程ぎやうじやうを問とふと山やまを下くだりては禪院ぜんいんに
 到いたり靈れい王おう菩ぼ薩さつ小せう見みんて拜まがりて菩ぼ薩さつ出い迎むかへて礼らいを施せし大聖だいせい
 徑みちを把とつて切き終しゆうすや菩ぼ薩さつ喜き々々と日ひを行者ぎやうじやう頭かぶを打う振るては魚う曾そて
 切き終しゆうすは靈れい王おう菩ぼ薩さつ曰いく然しかを何幹なにかんありと我山われやまには未まだもも行い者ぎやうじやう

火焰山くわえんに阻とりて又またより羅刹女らしやくにょが芭蕉扇ばしやうせんに搦あびて計けいらはば友とも小せう未ま
 由よしと訣けつつてたれを菩ぼ薩さつ笑わらひて曰いくは深ふかが芭蕉扇ばしやうせんの巔たかねには混沌こんとんには
 る時とき天地てんちと俱とも生なむや死しの二種にしゆの宝貝ほうがいゆて大陰だいいんの精せい采さいなり此故このゆゑ小
 能よ火ひをは止とむは倘あらば人ひとを搦あぶは時とき一息ひといき八万四千はちまんしよせん里りをは標ひょうのは火焰山くわえんの差
 やでは只ただ五万ごまん余あ里りの行程ぎやうじやうより往むか昔むかし如ごと未ま吾われ小せう一粒ひとつぶの定風丹ていふうたんと一柄ひとへの
 飛ひ竜りゆう杖じやうを授たまけぬ飛ひ竜りゆう杖じやうの既すでには黃風怪わうふうかいを降くだり伏ふせし時とき是このときを用もちひて妙
 を頭あたまには吾われ今いま彼か定風丹ていふうたんをは你なんに授たまへん是このときを帶おるは時ときに彼かがは扇あふ搦あびて
 とは一ひと寸すんも動うごくは又また有あるはべはどと彼か定風丹ていふうたんを授たまけぬ人ひとを行者ぎやうじやう大だい小せう惟ただ喜き
 拜まがり謝あやまりて是このときを受うけし糸いと針はりを借かりて衣ころもの襟えりに縫ぬいひて菩ぼ薩さつ小せう別わかれしては菩ぼ薩さつ小せう勛けん
 斗と雲うんを跨またりて暫しばらく時ときの間あひだに翠雲山すいうんざんには歸かへりて鉄てつ棒ぼうを以もつて門かどを打う破やぶり
 々々羅刹女らしやくにょ駭おどきし此この猴さる実み小せう奇き術じゆつあり吾われ扇あふを以もつて人ひとを搦あぶは時ときを

忽ち八万四千里を漂はせ流為何とて早く廻りまわすや吾今西三扇
 揃ぎるを再度飯つとまる夏有べうと此と剣と扯提門外へ跳つと出此
 浼猴又まつて死を求るや行者笑つて曰く嫂々舌舌と止て扇を
 吾小借めん羅刹女雲つて曰く浼猴你さう子を陥へ入其雙言さへ未
 ご報つは為何今扇を借めん疾く劍下の鬼とるんとと両刀と廻て伐
 て蒐る行者鉄棒を振く相迎へ五七合戦小死小羅刹女密小芭蕉扇
 を取出し行者小向ひく揃ぎるる小行者身小定風丹を帯く此を端
 然として更小揺は又列ねて揃ぎるるも愈動く光景ゆる羅刹
 女慌得扇を収め洞の中小越りて門を嚴く関へけり行者身小震
 して蟪蛄虫とるる門の縫裏鑽より潜り入裡の容子を伺ひるる小羅
 刹女小的と呼で吾今口乾きて堪がう疾若湯と合手まらと云小奴

的急ぎ若湯を汲まる行者是を覗き見小若の泡多く有るる小ど行者
 忽ち一箇の謀計と思ひつき飛まつて若の泡の間小潜り入と羅刹
 女は是を知ると二度小喚乾ける行者の既小羅刹女が腹の中小入て頭
 てきを出して呼つて曰く嫂々吾小扇を借めんや羅刹女大の小驚き你那
 死小在て言さるるや行者が曰く我嫂々の腹の中小在吾今你小辛き目と
 見まへきさると腹の中小本相と頭へ舞跳つとるる小羅刹女疾く小堪は
 地の上小倒轉びて苦と孫叔吾一命を免せよ命を助けよと叫びるる行者
 是を聞て吾大哥の面小愛て你が一命を許さべ疾く扇を吾小借めんや
 倘不肯と云む此通りと再度腹の中小驕跳つと騒ぎるる小ど羅刹女
 を奪ちて苦と叫び扇の速く小借べきさう你跳る夏を止し行者是を
 跳つと止らるる小羅刹女の急ぎ小的小命とて芭蕉扇を把まらせ孫



西遊記三十一



三藏途
火燔山
困苦

西遊記三十一

叔いご扇を借へ疾く出よと敷きける行者咽の處まで出て口の中より扇
を持まつるを見届け置いて你口と聞けと呼らるる此巻を閉て羅刹女口
を張ひくく行者唯螻蛄とるり口より飛出井蕉扇の上ふ止り忽ち本
相を覆して扇を受取嫂々感懐と云まてく忽ち雲ふ打来て三藏の居
の方へど回らるる三藏の行者が扇を持って帰らるるを見く大怖ひるるを
行者の始終の光景を仔細談話の頭て師徒四人此家の老人ふ別を
告て立出西小行又四十里計の衝々小執氣甚しく行者が曰く師父日
馬より下く我此火を揃き消風雨の発るを待て然して山を越へんと想て
彼扇を持って火焰山ふ登り到り力ふ任せく一度揃けば山上火光燃々として
盛ふり再度揃けば更ふ百陪とるり又揃けば火千丈計とらるり行者両
股の毛を焦り慌忙とらめき三藏の方へ馳帰り師父疾く逃る火が燃

まりの候ふと古芭蕉味び多しと二藏驚き急ぎ馬ふ打乗て師徒四
人逃帰る又二十里計の衝々ふと此てき山の陰ふ懸心ける行者扇
を投捨て三藏め向ひて云けるやう不濟又三三彼孽畜を束を束き
く偽物を借らるや此扇とて火を揃けを揃く小列ていよく火盛
ふらる倘疾く逃むんを總身残らば焼盡さべかりとと太息つのでぞ
嬌とらる

牛魔王罷戦赴華筵 孫行者二調芭蕉扇

此時一人の老人獨の小的め斎を齋せまらる身を屈めて礼を巨基
人の火焰山の土地神ふて候聖僧師徒ふ齋を献らんとて持まつる
願くは是を受る人行者土地神ふ向て曰く此火焰山の火の那の時ゆ
消へきと土地神が曰く此火を滅んとまらるふの羅刹女が芭蕉扇ふ井

んバ協ひざうゝ行者グ曰く我既ふ其芭蕉扇を借まかりて搦らるる
 火勢増々盛んらう土地神笑て曰く此扇の真の芭蕉扇ふあは行
 者又曰く奈何して真の芭蕉扇を求んや土地神が曰く真の芭蕉
 扇を借んと思つゞ旦牛魔王ふ求めり入行者が曰く然らば此火焰
 山の火の牛魔王放つ死らるや土地神が曰く曾て然あは此火を
 孫大聖王自ら放ちり死らる行者大いお督て曰く你漫言を吐る
 らざ我何ぞ此火を放らんや土地神が曰く大聖王が此火の謂を
 知らるは原此處ふ箇嶽の山の無つらるり五百年前の年大聖王
 宮と騒せし時太上老君の八式爐中ふて焼殺さんとてひく時大
 聖丹炉を踏破火の中を逃出らる其時丹炉落碎けて降り此
 山とららり此故内ふ火氣を包と終ふ一座の火焰山とらる五口則ち

彼丹炉を司らる死の道人らるらるが老君我憐念めて你丹炉を破め
 るると怒りひ此処追下らる火焰山の土地神とてあへり行者が曰
 く你真の芭蕉扇を牛魔王に借よとて然らばとも牛魔王今翠
 雲山ふ右む土地神が曰く牛魔王の羅刹女が大なるとて今も彼死
 め在は今積雷山鹿雲洞ふ一個の狐土あり余言貴中と百萬の家
 縁あり近き頃狐王死て跡を継べき子や独の女見ありて玉面公主
 と号く家言さるらると雖も是を招き管する人らる牛魔王が神通廣大
 らるを聞らる玉面公主親自招りて夫とらる亦牛魔王の玉面公主の
 美色を愛て今の羅刹女を捨て鹿雲洞に居住する然も大聖彼延
 め到て牛魔王逢て真の芭蕉扇を得り是を以て火を憤らるが
 一ツあり師父を扶けて彼山を越えらん二ツあり永く火を除きて此処の

僥倖するべし三ツの五口又天小降り老君の教を聞き得べし行者が
 曰く積雷山の何れに死ありや土地神が曰く是より南方の雷山に
 行程おのそ二千里ありて彼山に到るべし行者聞て八戒と悟浄を呼
 びて曰く吾今より積雷山に到り扇を借まらば汝等師父を護
 る日土地神を飯まじらばと云捨て雲小打の南を指てを馳行け
 る半時計と申して忽ち彼山に到りつとき雲より降つて松陰の細道
 を過行ぬ箇の石門有て積雷山鹿雲洞と云六個の大字を鑄付し
 行者門外に在て動静を伺ふ死に裡より一人の佳人出まらるを見
 ぬ定ぬ是沈魚落雁の粧ひ閉月羞花の容貌あり忽ち行者を見
 たる方の小鷲さき急お逃入る門を闔し奥に入る牛魔王に向ひ吾今日
 偶門を出て花を捻んと思ふ死に一人の和尚門外に佇立我を伺ふ其

摸搦面懸臉おして恰も雷公の如く我既お鷲死せんと致しる牛魔王
 王是を聞て賢妻を怖る言又するは五口若禿子を見てまらばと混
 を扯提て門外にまらり出你那厮を我門外にまらると伺ひ覗きこ
 死礼をとりまや熱く立去と呼そりるを行者進を寄て礼を施し
 長兄貧道と亡心記のや牛魔王行者と孰々と打視て你の聖天大
 聖孫悟空さばや行者聞て老孫則ち孫悟空さり別してより今
 く音信も為ざり故今日故意々々まらりて訪ね候ある牛魔王叱
 て曰く你説話の不臆口をの言又するは向年我紅孩児を害し今何
 の向顔ありて吾小見のやや行者曰く長兄誤つて吾を恨る言又する
 は今郎神通廣大ゆて吾業お近く言録のど何ぞ業を害せん
 や唯其時今郎我師父を捉へ其肉を食喰んとせし故お観音



西遊記 第三十三回



行者きんぎょや
八ちゅう戒ね
魔ま雲うん洞どう戦せん

西遊記 第三十三回

菩薩目を勧めて飯復らまきめ當今善財童子と有りて菩薩の身邊に
 侍るまを有りて然るも今何を以て吾を恨まらんや牛魔王曰く
 既ふ斯の若くもを命を免まざらん早も歸りまきの行者が曰く
 吾師父今火焰山にて火氣小盡して行ま能はば長兄の芭蕉扇を借
 用んまと思ひ嫂々の許小到り懇小求めまの堅執小く借ありば此改小
 長兄と拜して彼扇を借用人と思ひ是れを矢小つる長兄慈悲を無の嫂
 嫂の許小告て万望小耐を借多人用ひ畢らば早も返り奉らん牛魔王
 小怒り借の我宝贝を借人が為小まらざる不客々々且我一棍と嚙へよと
 て劈心小打て蒐る行者も鉄棒を指さして七八十合戦ひける此時山の
 上小人色有て牛兪兪吾大王筵宴を設て貴王を待るの更久く早も
 まりの人牛魔王目を開て行者小向ひ吾今明友の方へ筵席小呼ば行人

此改小你を助くるぞと云捨て越り行門小へて堅く閉く玉面公主小謂
 て曰く今まらざる鬚臉和尚の孫悟也子との者るる吾遠く追退けんと
 を今のまらざるは我今明友の許へ筵席小呼ば行り小寂くとも酒
 を嚙む心を慰め我飯を待多人と云置て碧水金晴歎小打棄て雲霧を
 發して出去るる行者の山頭小隠し居て牛魔王が西北を指て出行を見
 る彼が行向を伺ひ見んと思ひ一迅の風と化して牛魔王が迹を慕ひ追行
 處小乍ち一座の高山小到る爰ふて牛魔王を失視るる小ぞ行者本相を
 頭一路と氷て尋ね行を山中小一箇の深淵あり一邊小大の石碣と建
 乱石山碧波潭と云六個の大字を彫付り行者心小思ふやう牛魔王の
 定此水中小行つると覺ゆ渠が友とまらる者曾に蛟竜鼉鼉の類ひるん
 怨生して我水中小潛り行て尋ね見たりと思惟の竟小一個の蟹と意

水庭ふ潜り入り見ぬ心一箇の宮殿あり廊下小啓水金暗黙を
繫きおき牛魔王の殿の正中小座一老竜王と對座若子の水怪蛟竜と
も皆輪座小列居て觴の指扣してぞ在ふ行者忽ち一箇の謀計思
ひ付身を覺て牛魔王とりの廊下の金暗黙を解放ち見ふ小啓衆
原の淵ふ越て出頭ち翠雲山小駝行芭蕉洞小到りしハ羅刹
女が小女的ども是を見付多心小真ふまの入り爺爺尊遠と呼り
々の羅刹女惟ひ出對し行者金暗黙とと一邊小控在裡小入て座
と羅刹女の真の牛魔王と思ひ恨泣て曰く大王何とて新なる妻を
寵愛し斯吾と捨るや今日又忘廢る風吹てり此死への回り多ひ
ぞや行者笑て曰く你と捨るふ有さのども彼玉面公主吾を迎て後
種々の幹成繁閑さの余りふ久く彼知ふ止り近頃彼孫行

行者火焰山を越んと欲て吾宝官芭蕉扇を求ると聞倘まことさば這
扇を捉へ微塵ふる我児の眞言を報んと思ひ此故の飯とまをせ
羅刹女が曰く大王のぞ知るや吾既小彼捕め命を失つんせ
一ろり行者故意と驚きける氣色ふ彼淫据りつの程ゆり此死あま
まつろど羅刹女昨日戦ひ趣む我腹の中ふ入て惱扇を借るま
どの仔細と語りける行者の牛魔王胸を叩て嘆息し你誤て吾宝貝
を奪お借るる為何して把返さずき羅刹女聞て言を放心しゆ我深
ふ借るる偽物の扇より行者聞て然を真の扇の那死お置るや羅刹
女が曰く扇の深く藏め置るを更お聖慮有べうは且彼心々と座て酒
るりと喫るんと夫より小的お分付て宴を聞き酒截をまう令手出させ
羅刹女が曰く大王新なる色ふ心を移り我結髪之情を心とぬふま

ちやうど行者杯を把くこと久しく外に在て你の家の中の幹を治させ
 交しく奥醜劇み及びびくろ小羅刹女の既み春情十分お登つて公官淫戯う
 女権情で是をも喫く又行者お宿り公行者も教杯を傾けて指つ押つ
 かつと見て行者が曰く你寶貝を何処に藏め置つや彼悟空の神通
 廣大なる改準倚形を穿くまの奪ひ去ま有んうと五日甚ぞ安堵に
 羅刹女亦笑ひ顔て口の中より扇を吐出くろふ其方りさ本葉の君
 行者手お合手に打視て斯の如く小る扇為何ぞよく八百里の火を消
 んや羅刹女驚ゆて言ろろの大玉此裡玉面公主お魂を奪ひ吾家此宝
 貝の妙有まんと心とむの尙是を大きせんと思ふ時の左りの手の大指
 ぬて扇の柄を堅く押へ啞啞啞啞吹呼と唱る時の其丈一丈おも二丈

ぬもろろ那ぞ八百里の火を怕んや行者聞て大い小惟憶心ち扇を口
 小合と感激と云捨く本相を顯し門外へとい出くは羅刹女の身へ行
 者ろろまを知て大い小驚て多時言をも發ま能は彼方を睜み嘆
 息は行者の顔て山上お登り口より扇を把出し羅刹女が教く如く啞
 啞啞啞吹呼と唱くを果然此扇一丈計この大いさとろろみろろ行
 者心中大い小惟ひ勇とろ然とろいども是を原の如く縮るの法を知
 らしむ証方ろく其終めて扇お扯連き三藏の居る方へぞまぎらる
 猪八戒助力敗鬼王 孫行者三調芭蕉扇

却説牛魔王の碧波潭お在て竜王と筵宴をとり宴席終小果丸の
 暇と告て取んとま竜王則ち送つて出牛魔王御小廊下お捨き置
 一金暗敷在ざりろろの爰彼死と尋ね搜は竜王是と見て牛爺

の全時歎何死へく失くろ誰も知まらぬ
 位の水怪跪踞て我門尊宴の初めより場知ふ有く酒散を献ぐ或は
 樂と奏す此故ふ一人も外ふ出む原未別人の未つろく見れば唯一隻
 の怪気う蟹の未つろく更ふ見知ぬ斬らる彼蟹何時の間ぬ失け
 ん金時歎も其頃より見え候む牛魔王是を聞て勿心ち分て借は彼
 孫悟空蟹と交下て此知ふあり吾金時歎と次皿と又吾形ふ愛はく
 此歎ふ打東翠雲山ふ到つて羅刹女を敷きて芭蕉扇を奪ふんとさるの
 計畧ふ疑ひろと思ひくれば頃て老竜王の荒増此まを物語り別
 を告く碧波潭をまて出雲を奪て飛ぐごとく小翠雲山ふ越つて行芭
 蕉洞ふ到つてこれ羅刹女の脚轉び脚を打てぞ叫び居る又一邊ふ金
 時歎の繋ぎ右を見く牛魔王高き小呼をうて夫人悟空の未らるる

一やと問羅刹女の牛魔王と見下るも越つてよりて掴つて我翁の罪あり
 つて集度情愿と志す金時歎を振め小奪は深徐が容と愛は爰ふ未
 つて宝贝を尋ぬ我那ぞ深が爰化る支と知人や寔ふ徐のまもさるぞ
 と思ひ宝贝と出くこれに那斬奪ひ取て逃失くろ實ふ吾悔くて死ん
 とは牛魔王が曰く徐日逼工とるも我彼振めを追うけて忽ちふ打
 殺く皮を剥骨を割く徐が為ふ断念とべしと羅刹女が帯く一宝劍と
 把てまゝり出火焰山の方へ追行くる不交時行者ふ追付らるる行者は更
 小身を知ば芭蕉扇を扇ふかけて怡顔悦色めて三藏の居る方急
 ぎ行牛魔王是を見て今渠と戦ひくるとも容易に返まへる
 ぎ倘却て那斬我を搦とあつて八万四千里を吹飛されて愈難為ふ
 及び今先謀計を以て返返さん唐僧の徒身ふ八戒とのあ者あり



見猪の奴精みぶたのぬせうひて昔日むかし我出會われであひまひてよく知しつし我今われいま来きるが容ようと愛あいに此疾このまじを
 欺あやまるべしと忽たちち身みを愛あいじて八戒はつがいが摸ま様ようとあり前まへへ回まわりて行者ぎやうふ向むかひ
 言ことをわけて師兄しあに奈何いかんして遅おそかりし師父しふ徐じゆが歸かへりの久ひさき故ゆゑふ怕おそく
 を妖怪ようかいが手て列れつ大きおほくして宝貝ほうはいを奪うばひ難がたく尙なほ難がた為なるや及およびざらん你
 行ゆて力ちからを助たすけよと曰いひて故意こご々々々々吾われを遣つかへし行者ぎやう笑わらひて曰いひ管くだに
 費つぎやう心こころとあると我われこ小扇せうせんと奪うばひまじらる牛鹿王ぎやうろうおうとぞと情うれき風情かぜのよて
 師兄しあに怎麼いかんして容易やす奪うばひぬいしと行者ぎやう原もとよりの容よう子を件ついで一ひと語ごに
 多おほしと牛鹿王ぎやうろうおう曰いはく然しかるを師兄しあにさぞうう勞つらむぬひとらん我今われいま師兄
 小代せうだいつら扇あふぎと擔かかひ候まちらん行者ぎやう怎いかん生なま假ま的てきのるまを知しんや頭あたまて扇あふぎと八
 戒はつがい小付せうづ与よるれを牛鹿王ぎやうろうおう何いかんれ知しらば口くち小咒せうじ文ぶんを唱となぐる小彼せう芭蕉ばしやう扇せんふ
 小編せうへんと杏葉ぎやうのぞくうらふらう此時このとき牛鹿王ぎやうろうおう本相ほんさうと現あらはれ濛もう猴こう我われと認しん

得えらるや行者ぎやう驚おどき見みると見みふ是則このときち牛鹿王ぎやうろうおうを乱おどれ他たで去いる
 怒いらる雷らいの若わかく小爆せう躁そう吼こう鉄棒てつぼうを揚あげて打うてかゝる牛鹿王ぎやうろうおう敢あて戦いくさを父
 へは芭蕉ばしやう扇せんを出いして行者ぎやうと揃あはる行者ぎやう個ひとより身み不定ふぢやう風丹ふうたんを帯おびつと
 をすも揺ゆるむ仁王にやう立たち成なりて渠みちが揃あはる任まかせらる牛鹿王ぎやうろうおうも又また驚おどき慌あわ
 了おつたがひ宝貝ほうはいと口くち小入せういる吞の二個ふたつの宝劍ほうけんと回まわして行者ぎやう小代せうだいてのら
 行者ぎやうも鉄棒てつぼうを因よて相戦あひあひ互あら半はん空くう中ちゆうふ在ありて精せい心しんを抖ふる搜た悪あく戦せん
 ちるま三百さんひゃく余あまり合あ更さら小卻せうじやくく心こころもろく命いのちを限かぎと闘たたかひて却かへて説と三藏さんざうへ
 路みちの二邊ふたへ小座せうざく多おほひ火氣くわき小蒸むせして口くち渴かつき心こころ焦こちて忍しのびて土つち地ぢ神しん
 小對せうたいひ我尊われそん神しん小問せうもん彼牛鹿王かぎやうろうおうが法力ほふりと行者ぎやうとの何いかんと勝かちらん玉たま地ぢ神しん
 が曰いはく彼牛鹿王かぎやうろうおう神しん通つう廣くわう大だい中ちゆうて法力ほふり無な邊へん正せい小孫せうそん大聖だいせいとの平へい手て
 の的あ敵てき手てるらん二藏にざう問もんて行者ぎやうの道みちを行ゆきおるして三千里さんせんりを往むかへ

と暫時の間ふ有と雖も今日行て一日ふ及び未飯らば心定牛魔王
と戦ひ勝まきを得さると覚えらる八戒修行て師兄を迎へ尙敵と戦
ひ在る力を扶く扇を借まき八戒領事て貧道行安うと雖も此
死の行路を知らば願く土地神と俱へ行へ捲簾將軍の師父の身邊
ふ在る是を守護し多く吾の今土地神を路問とて大聖を尋めべ
三藏たのめ喜んで是も随ひゆ土地神の八戒を伴ひ南をきて
ぎ行期る處ふ忽ち空中ふ喚き叫ぶる聞えたる八戒驚き雲頭
ふ立て是を見せの行者と牛魔王と爰ふ在て攻戦ひ雲霧を透し唇
を出し火焰を放し秘術を盡くして争ひつる八戒高く叫び師兄我未
つと戦ひを接らつると呼らつる行者八戒を見て戦ひつる小嚙
すつて曰く吾一旦彼扇を奪ひつるを此妹精八戒化まつて把返す

つとと語つるを八戒聞てたのめ怒り此浴牛急度我摸様ふ爰
師兄を欺きつるごとて釘釘を把て飛かると没頭没臉の小乱を突牛
魔王の行者と戦ふ爰既一日力勞し弱とつる死ふ今又八戒が釘釘
の兇猛を見て竟ち敗陣して積雷山鹿雲洞ふぞ逃帰る行者八戒跡
小続き追躰まの洞の口めて追迫る牛魔王取て返し二人を相敵ふ
つとつ合又散々小戦ひつる玉面公主此物音ふ驚きて言ふ爰の小的
小命とて戦ひを接しむ小妖的ども命を受け個々鎗刀を回して打て
懸る牛魔王たのめ喜びまきを奪つて指揮さむと一洞小把圍を餘さ
ふとこそ責らるる行者の半豆圍く竟小戦ひ善かむ八戒の釘釘
を拏むら圍を破りて逃出さむと行者の勦斗雲ふ打束て空中ふ逃
昇り土地神ホと二知ふ集り急度つせんと高量と土地神が曰く大聖

天逢急慢さるまじうと師父途ふ在待難多の個二再度洞門を破
つ他と戦ひを交へぬ我又引領し如の陰兵を以て力を援け候さん
行者八戒をたると云て陰兵と一齋ふ再度洞の門前ふ到り行者鉄棒
を揚て門を微塵ふ砕く牛魔王の玉面公主始終の光景を説話
少時足を休る處ふ忽ち行者門を破りつりと告まらる牛魔王驚き又
混鉄棍を把て走り出行者八戒を相敵あつて相戦ふ夏百餘合見ぬ
力尽敗北し洞の中へ逃入るとまらる土地神陰兵を卒て洞の口を遮
つし止り打込くと防ぎつら牛魔王又翠雲山へと逃行を行者八戒
す間もろく追迫む牛魔王身を道もぐろく忽ち一隻の天我鳥と
るり虚空と差て飛昇る八戒土地神亦是を知む専ら彼是と尋ね廻る
行者笑て曰く你们空中を飛者と見よ八戒是を見て曰く是一隻又

の天我鳥より行者曰く彼天我鳥則ち牛魔王が復せしより我追慕して
捉べし你们洞の裡ふ入て小姑的を伐尽せ八戒土地神是を引て急
ぎ洞中へ伐て入行者の忽ち身を愛して一隻の海東青とるり空中
遙め飛昇りし雲眼より逆様ふ落りまら天我鳥を捉んと劈かんと
牛魔王行者が言ふしつるを悟りて大鷹とらりて飛まら海東青と捉ん
とは行者是を見て又鳳凰と愛して大鷹を捉んとは鳳凰の禽中の
王なる者もある牛魔王再度愛むる夏鐵をば頭て山の岸ふ飛下りし
足の香樟と愛して忽然とて草を食ひ居り行者是を悟り虎ふ
言ふ馬まの香樟と食んとは牛魔王狼狽騒ぎ急ふ大豹と仕て
虎を討んと飛めり行者是を見て又狡視とるり大豹を目をけて馴ま
る牛魔王かろまろと思ひ忽ち黄獅と愛し劫誇色の霹靂の如く出て

後視を引裂食んと此時行者地上に倒轉と見え一足の大
 象と云る鼻の長蛇のごとく牙の筆ふ似し牛魔王堪へて吃々と噴
 出し終ふ本相を顯し忽ち一足の大金牛と云る頭の高き峯の如く衆の
 光の雷光の如く兩隻の角の兩座の鉄塔の如く牙の排利又似し頭
 より尾ぬまりて長さ三丈千余丈蹄より背の上に至り高き三丈八尺高き
 呼りて曰く你儂猴今我を怎麼とまらや行者是をこえて回く本
 相を顯し大喝一喝と云るよと見え一萬身の高き一丈大頭の泰山似
 て眼の日月の如く口の恰も血他ふ等しく牙の門の扇の正しく鉄棒を執
 て牛魔王を打牛魔王角を以て是を架止兩個半山の裡に在て散々小
 戦ひつゝの宣ふ山の崩し海も湧返り天地も是が為ふ反覆まらんと駭く

繪本西遊記卷之三

早池清

